

産地戦略

実施期間 令和8～12年度

実施主体 西讃地区環境にやさしい農業推進協議会
都道府県 香川県
対象地域 観音寺市、三豊市
対象品目 ブロッコリー



新たに取り入れる環境にやさしい栽培技術の分類

化学農薬の使用量の低減	温室効果ガスの削減（水田からのメタンの排出削減）	温室効果ガスの削減（プラスチック被覆肥料対策）
化学肥料の使用量の低減	● 温室効果ガスの削減（バイオ炭の農地施用）	温室効果ガスの削減（省資源化）
有機農業の取組面積拡大	温室効果ガスの削減（石油由来資材からの転換）	温室効果ガスの削減（その他）

目指す姿

もみ殻バイオ炭の機械化施用技術の導入を推進し、環境保全と生産性向上を両立する「循環型農業」のモデル産地を目指します。土壌改良による高品質なブロッコリーの安定生産に加え、J-クレジット制度の活用で炭素貯留を収益化し、農家所得の向上を推進します。省力的な土づくりを通じて環境負荷を低減し、持続可能な農業をブランド化することで、次世代が誇りを持って挑戦できる、活気ある産地の姿を確立します。

現在の栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名 （年内穫り）					元肥施用 堆肥・石灰質肥料施用	定植			収穫				・ブロッコリーの定植は8月下旬から順次実施され、60日～120日で収穫を迎える。定植時期や品種により5月頃まで収穫は続けられる。 ・定植の30～40日前に堆肥と石灰質肥料を施用し耕うんする。10日間ほど馴染ませた後、元肥を施用し、畝立・定植する。
技術名													

グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名 （年内穫り）					元肥施用 堆肥・石灰質肥料施用	定植			収穫				・主な作業は、現状の栽培体系と同じ。
技術名					バイオ炭の農地施用								・バイオ炭は堆肥と同時に施用（環境にやさしい栽培技術）。投入量は3年サイクルとして1年目：7000～8000％/10a、2・3年目：800％/10aを基準とする。 ・施用については、軽トラック搭載型マニアスプレッターの利用（省力化に資する技術）が可能。

グリーンな栽培体系等の取組面積の目標

	現状R7		目標R12	備考
（参考）対象品目の作付面積（ha）	410	▶	410	
グリーンな栽培体系の取組面積（ha）	0.1	▶	1	
環境にやさしい栽培技術の取組面積（ha）	0.1	▶	1	
省力化に資する技術の取組面積（ha）	0.1	▶	1	

環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術の概要

〈技術の内容・効果〉

分類	産地の慣行	新たに取り入れる技術	期待される効果
環境	－	▶ バイオ炭の農地施用	温室効果化ガスの削減 土壌物理性の改善
省力	堆肥や土壌改良資材の手散布 (定植前)	▶ 軽トラック搭載型マニースプレッターを 利用した散布	作業時間の低減

〈技術の効果の指標・目指すべき水準〉

分類	指標	現状	目指すべき水準	備考
環境	バイオ炭の施用	－	▶ －	定植前の農地施用
省力	資材散布の作業時間削減(hr/10a)	3	▶ 2	散布作業の省力化
			▶	

* 環境にやさしい栽培技術のうち化学農薬・化学肥料の使用量の低減および省力化に資する技術については、原則、検証結果を踏まえて効果の指標・達成すべき水準を設定する
(有機農業の取組面積拡大、温室効果ガスの削減に資する技術については、当該欄の記載は任意とする)

* 化学農薬の使用量の低減については、どの剤の使用量を削減するのか、どの剤からどの剤へ切り替えるのかが分かるように記載する

グリーンな栽培体系の普及・定着に向けた取組方針

植付け前の講習会や植え付け後の現地巡回等の機会を活用して情報共有を行うほか、賛同者に対しては栽培導入マニュアルに基づく指導を現地で言い 推進を図っていく。
--

関係者の役割

関係者名	西讃農業改良普及センター (事務局)	JA香川県西讃営農センター	三豊地区有機野菜部会 (生産者)	
役割	栽培導入マニュアルに基づく指導 導入効果の確認 Jクレジット制度の周知	取組賛同者の拡大支援	栽培導入マニュアルに基づく取組拡大	

その他